



326
21



始



特 224
836



歌集

六疊の玉宮

錦織く子

昭和四年
中央図書館
1929

日曜世界社

序

幾千萬石の砂を掘り越しても、砂金を発見することは頗る困難なことである。それにも似て、よき詩人を発見することは、さう容易に得られるものではない。況んや、生命藝術の基調に觸れて高い香を神に捧げる讃歌の作者は幾百万人の中にもさう多くはない。

日本で、女流詩人は近頃數を加へた。然し神への讃歌をうたふ作者は、まことに稀である。さきに故野口精子女史が最も優れた作者であつたが、今また私は錦織くら子夫人に、新しき女流讃歌作者を発見して喜んでゐる。

錦織夫人の歌詞は自由である。夫人が、日常生活の平凡事を捉へて、生命藝術の各方面について、自由に歌ふ氣持は、水道の活栓を開いた時に、水が自由に迸り出づるにも似てゐる。平凡事をうたふ詩人は、至上の神に浸つた人でなければ歌へない。必ずしも感情の激しない日、必ずしも、激越を感じない瞬間、凡々たる一細事をも捉へて、うたひ得ることは宗教藝術の奥義である。錦織夫人が、家庭の煩はしき心遣ひの閑々、歌と生活を織混せて、奥

床しい表現をものせられたことは、永く夫人を知つてゐる私にとつてはインスピレーションであつた。この歌集を出さうと云ひ出したのは私である。私は夫人の雄健な力強い神への讃歌と、或ひは子供につき、或ひは夫に就き、女らしい家庭生活の煩はしさに就き歌はれることをいつも各種の宗教雑誌を讀んで、日本の宗教界に珍らしい女流歌人であると思つてゐた。華胄界の人々は、早く有名になる。それらの歌人は、早く世の注目を惹く。然し、數人の子供を引連れて、裏長屋におしめを洗濯する女流詩人の生命讃歌は、さう早く世の注目を惹くものではない。まして、何等の系統もなく、何の保護者もなく、獨立獨歩、臭い流し場と、きたないおしめの洗濯場の間を往復する色醒めた家庭婦人の平凡な歌は世人の注意を惹く筈がない。世情の評判を氣にしてゐる批評家達は、此平凡な生命藝術の奥義を發見することもしない。

物足らず ことごと足らず

されどなほ

石の枕にまどかなる 夢

錦織夫人が缺乏の中に、神の平安を發見し、神より授けられた二人の子供

に、最上の藝術を發見してゐる氣持は、まことに尊いものである。

玄關に ちいさき砂の足形を

二つ三つ置く

我が家の春

この詩人は裏長屋にも神の神秘を發見し、六疊の狭い部屋にも、王者の幸福を味はつてゐる。

子が世界、馬車に自動車行きかひて

王者の宮居

せまき六疊

父は馬、母は馬丁に

子は王者

親馬鹿、子馬鹿 さても賑はし

ホームライフの春夏秋冬は、世界に於る最も神秘的なものである。夫人はこの意味に於て最も神秘的な詩人と云へよう。夫人がながくリョウマチスで病みし日、夫を米國に送り、保育所の嫗母を務めつゝ、宗教生活に精進して

わた日の歌などは、いつも私にとつて刺戟の昂奮劑であつた。

番せよと 仰せつかりし

蝶逃げて

ちさき王者の逆鱗に觸る

今、幸ひにして二千餘首があつた中より、六百首を選び出し、一冊の歌集に纏めらることを聞いて、私はこの上なく幸福に感じてゐる。

一九二九、六、二七

賀 川 豊 彦

攝津武庫川のほとりにて

六 疊 の 王 宮

錦織くら子著



父は馬 母は馬丁に
兒は王者
親馬康子馬康
さても賑はし

父は馬、母は馬丁に兒は王者

親馬鹿子馬鹿さても賑はし

「貧しきに似たれど富む」とパウロ言ふ

我れ六疊の王宮に住む

番せよと仰せつかりし蝶逃げて

ちさき王者の逆鱗に觸る

罰として母は胡蝶を菜畑に

追ひつ狂へる春の日の午後

玄關にちいさき砂の足形を

二つ三つ置く我が家の春

彼の星に通ふ心の底ひより

交響樂は高き音を立つ

おほいなる謎を残して星流る

久遠をしのぶ靈魂の秋

森に来て星を仰ぎつ祈るとき

聲なき聲をたましひに聞く

其の光り慕ひて止まず此こころ

生命は星に繋がれてあり

小星いさほしそらより空に流れ消ゆ

無限を描く秋のまぼろし

何事の意に満たざるや冬の風

反逆の子の聲あげて吹く

死の如くいと静かなり死の如く

いと厳かに牡丹雪降る

春の呼吸いとやはらかにかかる時

生命いのちの扉おのづから開く

白百合の夢よ其香よよろこびに

石も歌はん春となりしか

春の風閉ぢし扉を開けとや

胸むねたたくなり如月きさらぎの春

アネモネの花びら揺れて春雨の

しづ注ぐ日よ泣くすべもなし

花になほ黄昏ありと教へたる

ロダンを思ふ散櫻かな

此のこころ虐げられて僧院の

春かなしくも若き日を泣く(神學校在學當時の作)

問ひますな職責や何と責めますな

若き血おどる春の日の夢

秋の夜を戀慕流しの音の冴えに

ふと涙せり僧院の窓

我れとても木佛金佛にもあらず

秋のあはれを秋風に知る

露重く窓にうなだるコスモスの

内氣の娘何を泣けるや

絹の裾さらさら鳴らし我が窓に

來て忍びかに笑めり秋風

黑影をわが胸に投げ遠去りし

巨人の悪戯になやむ重き日

白き鳥くろき鳥などいつしかに

胸に巢喰ひて我が心喰む

生き惱む身の自畫像はスフィンクス

それなどにこそ似つかはしけれ

此のちさき心一つを的として

暗と光の征矢の絶えずも

故知らぬ涙湧き出づうらぶれの
此子かなしや僧院の秋

内に實を結びて外に現はれず
女は似たり無花果の花

歌あれな此のあけぼのよ朝澄みの
空は原始の静けさに似て

足柄の山と指されて笙の音を
しのお麓の曠原の秋

寒月はさと白壁に影投げて
墨繪と浮ける冬木立かな

オルガンの鍵盤にかなしや指先の
はづまぬ日來ぬ水仙の咲く

純なれや足柄山は手弱女が

白衣びやくえして舞ふ初春の窓

初日影舞ひて地平にかがやけば

黄金きんのすだれす我が籠る家

爆竹の空にとどろく音にぞ知る

南京町の新年の宴

靈魂たましいの二つ争ひもつれ合ふ

我れ明暗の悲しさに生く

暗黒の宵よ静寂じまよ胸底に

生きんともがき靈魂たましいの泣く

人屑よ愚か者よと自らを

唾せどされど棄てかぬる我れ

神なしと君なほ言ふや茲に来て
見よ南海の夕映えの空

其の戀を得とげし宵の七夕や

銀河は風ぎて星のさざめく

火の鞭に思はぬ冤罪を糺されて
悩むに似たり夏の真晝日

磯馴松わたる潮かせ漁夫の兒が
笑める白齒に涼しさの湧く

足投げて焼けたる砂に語る兒の
先づぞ眼につく赤銅の皮膚

世を渡る身を巡禮の友を得て

今日の門出や輝きの國(結婚に)

初秋の風忍びかに君と我れと

二つの靈を一つにして吹く

光りの子汝れをうらやむ金色こんじきの

強き陽に咲く向日葵ひまわりの花

み佛は静寂じじやくの堂に世を避けて

座禪に俗とかかはりも無し(奈良大佛)

和歌の浦よせて狂へる片男波

果さぬ戀の亂調を聞く(片男波にて)

南朝を語りて涙するに似し

金剛山の秋雨の色

須磨寺の夕べは悲ししみじみと

平家の秋を告ぐる晩鐘

入相を告げて黙せる鐘樓の

白衣の僧に落つる秋の陽

其かみは馬つなぎつと六本松

塔に故書く藤澤の驛

鎌倉や静けき際に釋迦牟尼の

禪三昧に夕日うすづく(大佛)

除夜の鐘熟睡の夢のふるへより

醒めて新らし元朝の春

大空の紅のとばりを透きて陽は

金沙を散らす初春の窓

天地は年と老ゆれど年となほ

みづみづしくも生くすべもがな

目に見えず音に聞えず何となく

物改まる心地するけふ

春なれば若き日なれば時なれば

強く生きんと靈魂たまははいふ

蒔く事も刈ることみなき空の鳥

知らずやちさき人間の群れ

紡績の女工の群れの一列車

それも春なり奈良の停車場

我が足を止めしは雲か青草か

新淀川の堤防に立つ

衣がへ見よ南海の山脈やまなでは

けふか春立ちむらさきを着る

我が魂たまのすべてを占たまむるものありき

奇くしき力ちからよ奇くしき生いのち命めいよ

春の風そよげば閉とぢし白はく金きんの

とびら排はして躍はるたましひ

病やみてまた我われれに歌うたあり五月雨ごがつりの

夜よはしみじみと泣なかんとぞ思おもふ

映うつれるは我われが影かげなりや淺あましき

十日じゅうにちけづらぬ蓬よもぎ生の髪かみ

近ちか松まつの名残なごりやいづこ浪速津なみかたの

鐵てつのひびきに淋しみしさぞ湧わく

白百合はくばくの笑わらまひ輕かろくもこの心こころ

澄すみみて光ひかりれり六月ろくがつの朝あさ

姫百合の紅よその香よカルパリの
殉教の血を偲ばせて咲く

初夏や大天地に橄欖の

濃き彩を投げ往にし子や誰れ

焼き芋の暖簾は青き氷屋の

すだれと化して夏は来りぬ

成金の聲かしましや大阪の

市街は煤煙ふる黄金の降る

屋形舟軒にさゆらぐ風鈴の

音より廣ごる浪花津の夏

白金の翅をあげて我が魂は

けふも緑の野を縫ひて舞ふ

花菖蒲玉の色なす濃むらさき

五月さつきに光る梅雨つゆ晴れの庭

五月雨の夜を獨り居てたましひの

ちさき震へを我れ、我れと聞く

すがすがし身に底澄みて響くかな

氣かや秋かや鈴虫の鳴く

色あせしカンナ淋しく秋雨に

濡れて眞土にかへる初秋

丈け伸びてちいさき足が初着うぶぎより

出づるも嬉し初秋に入る

山見つゝ歌あれかしとひた祈る

心は澄めり湘南の秋

生中に文學に耽りしさばかりに

胸にそぐはぬ事の多かり

若き日を醜女が憂ふ様に似し

虫になやめるコスモスの花

戀人の心遠のく様に似て

かなしや詩なく秋深み行く

兒の輕き熱に看護の面瘦する

母の幾夜は寝ざめ勝なる

廣告の樂隊を追ふ大馬鹿と

なりて愛兒に引かざるゝ母

虐げてなほ飽き足らず木枯しや

淋しき庭のはだか木を揺る

戦塵は絶えて平和によみがへり

山河若やく黎明の春(歐洲戦亂の終結に)

五年の暗を葬りあけぼのを

讃へてさやく明星のかげ(同上)

正月の氣まぐれ心我れを追ひ

道頓堀の春にさすらふ

貴婦人と濟ませど餌に迷ひけり

諷刺とも見る猿踊かな

むらさきの被衣ゆかしく打ちはえて

春を歌ふか國境の山

まぼろしを描きて戀ふる我れなりき

夢に求むる桃源の幸

春淺み奇しき力ぞわが胸の

靈鐘を揺るきさらぎの雲

何事か成さんと言ひつ此の二人

碌々として二年を過ぐ

鞭打てど進まぬ馬に似てかなし

想湧かぬ日の灰色の雲

打ち黙す隠者とき得てはなやぐに

似て草萌えぬ二月の野邊

きさらぎの雲なほ若し野邊に來て

木の芽に眠る春の魂

ヒヤシンス青き芽生えに光りあり

強き生命を見ずやささらぎ

鳥と化^たり夢なる島に夢の人

住む三月となりにけらすや

きさらぎの風やはらかに鉢植の

フリジャに来て春の夢吹く

虹のごとあまたの人に仰がれて

虹の如くに消えゆける君(友の死に)

友逝きの三人またの稚兒を残しつゝ

現うつしおん身の其の儘にして

末の兒が父の添ひ寢に乳房をば

夜半にさぐると聞かされて泣く(以上)

石叫ぶ春とはなれど我胸の

響さちいさし老いたりしかな

大いなる悟りに入りしそのかみの

聖者の相に白椿咲く

星一つ暗に流れて消え失せぬ

我れに解けよと天地の謎

春の風生命のびよと田舎道

四國通路の鈴の音もよし

罵られ荷物の如く扱はる

春日曜の朝電車かな

意に満たず玩具の中にはね返り

泣ける我兒を吹く春の風

母が頬も時に鼓となりけり

ちさき王者の御意のまにまに

犬はりこ耳ちぎられつおとなしく

ちさき主人の枕邊を守る

埃及エジプトになほあくがるゝ忘恩の

我やモーゼを泣かしむるかな

チウリップ赤きを愛でん我が魂の

火と燃ゆる色血ににじむ色

我胸の迷ひの宮をこぼつべく

神よ聖靈たまの火を投じませ

虚無破壊母をほとほと困こませしむ

茲にちいさき過激派のぬし

嬉々とせるちさき騎兵を背に乗せて

馬遊びする三十の父

汝れ故に我が家のどかに明け暮れて

二十四時を春の風吹く

此のほかは何をか戀はん夏の夕

身を透きて吹く淀の川風

成園の繪にせまほしき振袖の

麗人群れて灯の街を行く

八月の焼かるゝ思ひ創生の

赤裸にてなほ耻ぢぬ世を戀ふ

アダム・イヴ禁制の實を食まざらば

素肌^{ハダカ}に夏を過さまじもの

夕立や鬼の小太鼓大太鼓

天の行事の夏まつりかも

海狂ひ雷鳴る夜なり巖上に

人魚が戀をなげく夜なりや

人真似に歌詠むわれよ沐猴の

冠するに似て我れとおかしき

光りの子月を圍みて圓舞すと

春の夜空に仰ぐ月かさ

成園に繪筆からまし淀川を

麗人三人花すみれ咲く

水に浮く油にも似てこの心

身にそぐはざり春の陽のもと

黄金の光りを放ち生物の

輝ける見ゆ夏のあけぼの

罪劫の深きを凝らす天地の

火かや責かや炮烙の刑

陽になやむ赤きカンナの衰へと

我が夏瘦せといづれ眞夏日

思ふこと意に満たざればくわと怒る

氣短か人に似たる夕立

剃髪とならば涼しく安からん

なごど髪梳く八月の晝

雨しなば銀河は荒れてたなばたの

星も泣かまし夕雲よ散れ

嗚呼シオン我があこがれの故郷よ

永遠に酔はまし橄欖の香に

くりすます降誕の鐘ぞ鳴り響く

我が魂を揺り汝が魂を揺り

星さやぐ今宵猶太のベツレヘム

銀鈴たかく天地を揺る

くりすます王天降る日の曙を

かざるとばりや紫の雲

ベツレヘム神の子天降るきざしぞと

銀の小鈴を鳴らす星の夜

生れましやタイルの園に咲く薔薇の

色見せて散る夕やけの雲

あこがれに咲く火の花よ愛の花

彼の星降りて我が胸に咲く

群星の愛の調べにわが胸の

緒琴は鳴りぬ曲に合せて

くりすます稚兒が初演の初舞臺

もどらぬ口に「神は愛なり」

うなわ兒を見つめてあれば我が睡

汚れ多きに曇り來しかな



おほひなる

謎ものこして

星をがる

久遠をしのが

たましひの秋

君言はず我れまた言はず星清し

聲なき聲す天地あめつちの秋

凡俗になすみて生くる此身にも

秋は來て笑むコスモスの花

ちさき頬を墨べつたりには、笑める

兒は寺子屋の丁松に似る

曲れるを直しと言はんすべ知れば

世の智慧者とぞ歌はれにける

官能の羽ばたき軽くしみじみと

秋に觸れよとこほろぎの鳴く

以下八首リウマチスにて別府温泉療養の際

病める身はくれなる丸の船房に

在りて運命さだめのたはむれに泣く

病む人の窓にさし入る青き月

墓場の如き深き沈黙

足きかぬ身の悲しさよみじめさよ

杖おんにすがりて湯の町を行く

人満ちてしばし待つ間の物耽り

聯想おぼぞ通ふベテスダの池

環境を見つめて涙はてもなし

鉛をつめし胸の一隅

抱けよと泣きすがる兒をなだめつゝ

にじむ涙に秋の雨降る

衰へし我が面影の映るとき

鏡の我れは我れを泣かしむ

聞かざるに口を極めて我が宿の

下婢はしためは湯の應驗を説く(以上)

南海の田舎に静養の折

南海の風物われに教ふらく

自然に歸れ土になづめと

思ふこと自然の前にみなきよし

死して悔ひなき刹那いとしむ

村の子は我が草庵の軒に来て

ままごとすなり春の風吹く

落ち椿貝に盛られてままごとの

食卓にあり子等のさざめく

はるばると土の匂ひをなつかしみ

我が窓たたく春の客人

我が草蘆三たび訪ふべき王もがな

孔明氣取る春の氣紛れ

まんまろく父の背に寝ね歸る兒の

赤き夢吹く春のそよ風

我が壁に大いなる顔描きあり

小ラファエルの手すさびの跡

村人等^らもの珍らかに辻に立ち

春狂言の口上を聞く(以上)

我が歌に生命^{いのち}あれかし祈らくは

血あり熱ある感激のうた

我が愛づる橄欖の色生の色

わけてなつかし若き日の影

天地は樂の音^ねたかし野に山に

春がかなづる悅樂の調^{しらべ}

花に舞ふ胡蝶よおのがたましひの

亂舞に狂ふ春のまぼろし

政治論けうどからずやテニスも

蟻の騒ぎになぞらへしかな

我胸の花壇に咲きし紅白の

花を手折らん其のぬしや誰れ

汽車中にふと知りあへる小娘の

失業の子と聞くが悲しき

紡績に三年過ぎつと小娘の

かたるもかなし夜の汽車ゆく

雲青く山また青く水青し

溶けて我が住む空色の國

七夕の笹振りて行く五六丸

過ぎて静かに白き星散る

夏まひる畑に半裸のアダム・イヴ

原始の様のおもほゆるかな

ただれたる夕陽背負ひて働ける

囚人の眼になみだ涸れゆく

あけぼの、第一線を輝けば

天地黙して陽の前に伏す

鈴ひとつ天女の手より下り落ち

地にまろぶやと鈴虫を聞く

秋光る瑠璃の虚空に眼をやれば

生命の泉おとなくぞ湧く

秋空にこもる生命と此のこころ

觸れて奏づる生の一曲

幾千の星にむかひて我れ立てば

心ひそかに永遠に觸る

幻想の巻をひろげて過去未來

繰るもふさはし秋雨の夕

何となく無人の島にあくがる、

氣紛れごころ秋の風吹く

すと觸れし白刃はくじんを避く思ひして

胸かき合す秋寒の朝

さいはひに満ち足らひたる若人わかひとの

舞踊の如く赤トンボ飛ぶ

純真じゆんしんの美を我れ見んと希こひねがふ

瞳こころにうつる天地あまのつちの秋

秋の子は秋にあこがれ山行けば

鼓つづみヶ瀧も秋の音ねを立つ(有馬にて)

そと觸れし白絹を裂く手ざはりに

秋の風透く六甲の道

うたに酔ふ若人數人燭かこみ

時を忘るも秋なりしかな

潮鳴りをうたふ讚美歌の伴奏と

我が舟走る生の海原

物足らず事ごと足らずされどなほ

石の枕にまどかなる夢

ふと立ちて聞くとしもなく音に觸る、

辻音楽も秋なればよし

迷兒札さげて出で行く出陣の

武者をほ、笑み見送れる母

月今宵澄みて光れるこの心

あふれて成るや月光の曲

十二月行く雲早し風寒し

嗚呼あめつちの呼吸は老いゆく

時來り時去り遂にこの年も

無限の二字をちりばめて去る

昨日けふ天の扉は開かれて

春の序曲を居ながらに聞く

新らしき生の姿をまぼろしに

描きて仰ぐむらさきの雲

我が胸の生命の花を口づけに

來るは誰が子を春のそよ風

ここ三日我が世の春と丁松は

都大路を風切つて行く

獅子舞のあとを追ひ行く兒を追ひて

忙はしく暮るゝ母の正月

春立てど若芽も吹かず敗軍の

つはものに似る園の苔梅

オリオン座仰げば笑める星影よ

ピヤトリーチエの澄みし瞳に

同行の二字に信仰を刻みつゝ

西亞の旅に出づる巡禮(聖地巡禮を讀みつゝ)

黙しつゝ來り黙しつ仰ぐかな

モレヤの丘の宮殿の趾

むらさきに烟るモアブの山脈を

見つ、死海の岸にたたずむ

月白し岸に祈れる旅の子に

水もささやくヨルダンの河

苔青きヤコブの井戸よ二千年

生命の泉いまでも聖らに

虐げの趾を止むる土の牢

義人の哀歌底よりぞ湧く(洗禮のヨハネの牢)

眞青まさをなる水よ至純の生の色

ガリラヤ湖上波静なり

カルパリの丘にしたたる聖き血ぞ

巡禮の子の脈を流るゝ(以上)

以下數首良人の渡米を見送りて

兒とふたり船を送れば我が心

春の波立つ秋の波立つ

人ぞ憂き我れに化身のすべもがな

人魚となりて船を追はまし

ジャラジャラと下船を告ぐるドラの音

それも夢なり春の雨降る

わざ終へて君歸る日をまぼろしに

浮べて笑むや夢の醒めぎは

絶えて見ぬ幾とせ振りの世界地圖

ひろげて君が船のあと追ふ

此の日頃死の牢獄にあるごとし

淋し冷たし君あらぬため

まざれんと我れ圖書館にこもれども

尙も追ひ來る寂寞の影

天と地見えざる魂のいと細き

只一線に繋がれてあり

幸ひの其の源に觸れよとや

初夏の夜の星のかがやき

はつ夏の光り地平にたゞよへば

我れ詩の神の姿おろがむ

地に住める者みな動く世となりて

警鈴たかく大地を揺る

墓碑銘を血にて書かんと我友は

悲しき文字をふみ毎に書く

夏まひる置き所なき此身かな

火車くわしやに追はるゝ狂人のごと

天王寺ひる寝の窓に鳩なけば

冥府めいふの神の樂の音ぞ聞く

寝かねし間まにそと逃がしたる罰として

夏のまひるを蟬せみとりの供とも

寂さびかへる泣けよの宵よ眼めをやれば

空も静寂じまに星ながれ飛ぶ

群星ぐんせいは御座をととのへ歌ふらん

詩界の星をあめに迎へて(故野口夫人の墓に)

名にちなむ彼の夕ばえの色にこそ

魂たまの郷さとなる君の偲おもはる

君死して死なす常世のふるさどに

生命の影を現にぞ見ん

天上の君しのべとや夕ばえの

色に涙の思ひ果てなし

とこしへの故郷さして君かへる

生命の影を歌にとどめて(以上)

しみじみと我が靈魂に流れ入る

山より來る初秋の風

「眞實の外には美なし力なし」

ロダン是我れに斯くぞ教ふる

絢爛をきそふ紅葉の山にほひ

地は黄金の秋をたたふる

たましひに觸れて聞ゆる天地の

聲も聖らに澄める秋空

悲しみも將た淋しみも秘めて持つ

汝れに似て咲く庭の山茶花(義妹に)

生まに破れ死に行く人のあはれなる

様さまに似て散る軒の青桐

逝く人の生命いのちの如く絶え絶えに

秋の終りをかこつこほろぎ

我が前に黒線を引く魔人あり

生命の道にあはせ並べて

桐の葉はバサリと落ちて地にゆきぬ

自滅をいそぐ人の如くに

あたふたと出勤を急ぐ朝電車

人もあらざり我れもあらざり

出づるには自働車のあり従者あり

入りては仰ぐ黄金の塔

衆人の仰ぐ星なり光りなり

などラヴェンナの土と朽つべき(ダンテ六百年祭に)

若き日の夢をささやくバルゼルロ

壁に偉人の面影を見る

フロレンス遂に歸るを許されぬ

運命の志士さてはさすらふ

六百年今もあらはに面影を

ジオットの筆にとむるマイレンツエ

秋の夜の青き灯影も大賀師が

詩聖ダンテを説くにふさはし

春の風秋の風をば一と時に

受くる心地に神曲を讀む

只一字愛もて世をば動かす

光りとなりし南歐の星

無限より無限を示すその星を

仰ぐこの目に生命輝やく(以上)

若き名の春は我れにも若かりき

火の鳥は來て我が胸に舞ふ

南海の山ことごとく紫の

衣かづきして我が窓に笑む

噴水のしぶきは霧と高散りぬ

まぼろしに見る水神の舞

玉手座の春狂言の觸れ太鼓

追ひて兒は出づ紅梅の咲く

緒を切りて裸足の儘に歸る兒の

頬にも生命の春はみなぎる

春なれやいと忍びかに我れに来て

石の心に觸るゝものあり

春立てど石の心は解けやらず

笛吹けどなほ生命おどらす

たましひの芽ぐむ春なり我がうちに

萌ゆる生命の息づえを聞く

ゆるやかに雲の動けりあてもなく

物思ひつゝ、さすらふや汝れ

淡路島さして漕ぐ櫓のおと冴えて

茅海千里波しづかなり

またとなき若き日なればいとせめて

内に燃えよと火を噴ける山

笛吹けど生命おどらず胸打たず

三十路の女春はかなしき

火の柱くもの柱の道しるべ

カナンを指して我が群はゆく

紅薔薇わが半生のまぼろしを

見よと如くに緋と燃えて咲く

魚腹より吐き出だされしヨナのごと

祈れば心とみに明るし

大いなる夢を残して大地おほつちに

あはただしくも行ける木蓮

おぼろ月遠き彼方のまぼろしを

描ける人のまなざしに似る

燎原に火の廣ごるに似たるかな

心に萌ゆる春のたましひ

夢おほき子が築きたる砂の塔

理想おぼひの塔は浪に消え行く

碌々と過ぐる心ぞあじきなき

平凡に飽き平凡に生く

現世は金字塔かやあまりにも

生ける屍かばねのうづ高きかな

春の風かろき心を打ち乗せて

目に見ぬ天馬あま驅けり行く

沈黙の扉とざして只獨り

思ふもよしやおぼる月夜を

みづからにパベルの塔を築き上げ

神の怒りに觸るは誰が子ぞ

夜と晝と一時に來しや我が胸に

明暗の雲出で、争そふ

降る雨を楚歌の聲とも聞くや汝れ

虞美人草は面やつれ行く

かたくなの心の扉とざしつゝ

春に背ける友よ老いたり

あけぼの、前に我れ伏す薔薇色の

冠かむりして笑む南海の山

夜の辻に親子五人が舞ひ踊る

あはれはかなき浮草の生

意に満たぬ歌反古あまた火に投げて

吐息する日よあぢき無き日よ

夕暮れを園に虫追ふ腕白が

背になゝめする白き夕月

過去の夢繰れば廣ぐる哀愁の

頁ぞ多き若き日のうた



三千のサユが洩らす吐自心をば

一度に吐くや紡績の竹由

引籠りひたすら心みがけとや

秋が築きし水晶の塔

入り交る曙の光りと夜の色

そは或る時の我が心かな

憂き惱みなかりしものをバンドラが

象牙の匣を開かざりせば

一ぢにして二なり二にして一ぢなりき
かがやく星と輝ける魂たま

我が胸の砂漠は時に一陣の
颯風起りて砂けむり立つ

神をさへ頼みがたしとなす人よ
汝れ人間に何を求むる

秋なれや心聖くもみがかれて

天あまに聯れんなる水晶の塔

天の河なにを教ふる無限より

無限に續く白き一線

青空の中にひとひら白雲の

動きて物を思ふ秋の日

星の座に我がたましひも打交り

聲なき歌を口ずさむかな

顧みて我が足跡のみにくさに

たちろぎて立つ生の大だい道みち

大いなる其の秘めごとを彼の宵の

星と星とのささやきに聞く

歡樂の塔を築きて繚亂の

春の花野に住める若人

新らしき生命を戀へば新らしき

血は芽ぐみ來ぬ如月の春

黒壇のやみよ星なき死の宵よ

我が靈魂のすゝり泣く宵

喜びは我がうちにして踊る見ゆ

春がもたらす歡樂の舞

汝が秘むる春の力を大いなる

大地ことごと血の色に燃ゆ

赤き夢見つめて笑めるチウリップ

満ち足らひたる幸ひに生く

地の震へ紅蓮の焰水の責め

血は血を洗ふ狂亂の秋(關東大震災に)

火に死して灰の中より甦へる

不死鳥のごと疾く甦り來よ

茫として鈍き心に捕はれぬ

夢の夢なり空の空なり

悪夢より醒めし心地に茫として

どくろの舞のまぼろしを見る

星影をあまた加へて同胞の

魂を仰ぎて涙する秋(以上)

くりすます星の心とこの心

觸れて高鳴る交響樂かな

大いなるみ聲を秘めて星影は

高くさやけしベツレヘムの夜

生れましや讃への歌に牧人の

夢おどろかす天の宮人

我胸に久遠の響きつたふるは

天よりひゞく聖誕の鐘

幻滅の夢を破りてどこしへの

平和を告ぐる今日の生れまし

つのおえの魔神も矛をおさめつ、

共に歌ふや新春の賦を

星の世に星を守りて生くる子に

邪淫の花を投ぐる子や誰れ

遠ざかる物賣りの子の聲に似て

やゝに薄らぐ去年の思ひ出

氣紛れの心火となり水となり

火の原を吹く氷山を吹く

しかすがに月に恥らひ自らの

影を抱きて立てる裸木

我が心シバの女王にあらねども

欲りして止まずソロモンの智慧

君は泣き彼は怒りて我れ笑ふ

人形芝居に似たる人生

旭日は見よおごそかに昇り來ぬ

空も金砂の道きよめする

沈黙の扉とざして自らの

魂のすがたを探らんとする

ちぎれ雲ひとり離れて空を飛ぶ

我れにも似たる氣隨者かな

人前を耻ぢらひて立つ乙女にも

似て頬を染めぬひなげしの花

死を飾る彼れステバノを偲ばせて

さと血を流しアマリリス散る

奉祝の紅提燈を追へる兒を

追ひつ亂舞の火の海をゆく

火の塊は燃えて焰の舞となる

見よ我が歌の熱と光りを

石垣の土より出でし草の芽に

強き生命の奔流を見る

天地の生命に觸るゝ大いなる

輪廓を持つ我が心かな

海廣く舟はちいさし主よ父よ

あはれみ給へ生の海原

切り櫻やぶれ障子のそこゝに

青白く散る春の夕ぐれ

春の來て戀を知る身となりしかや

月も物をば思ひ顔なる

純白の心とこころ相觸れて

白木蓮に白き星降る

心臓を五つに裂きて火と燃ゆる

心を見する紅椿かな

沈黙の塔を築きてひとり住む

幸を教ふる秋の天空

死と生を一にせし日や君死して

君生くる日よコスモスの咲く(友の受洗に)

白金の弦を鳴らして秋の夜を

生命を賭けてこほろぎの鳴く

我れならぬ我れあり胸の一隅に

バベルの塔を築けるも憂し

主の心サタンの心こもごもに

我れに二つの心臓の鳴る

秋今宵軒のまがきの月あかり

星座の如く白むくげ咲く

我胸をのぞけば嬉し火の音を

立て、花咲くたましひの春

地を裂きて寸ばかり吹く草の芽に

強き生命をきざむ三月

我れ強く生きんが爲に死を賭しぬ

一切か無かブランドを愛づ

いと軽き足ごりをもて歌ひつゝ

若芽の上に踊る春風

一隅にひそむ心の驕り來て

凡てを我れに抱かんとする

迷宮の扉ひらかずグリームの

お伽の倭人呼ぶよしもがな

青二才廿歳の甥が『白村』の

戀愛論をとやかくと言ふ

若人は訴へ泣けどすべもなし

見よこぼたれし戀の殿堂

山あらし瀕死の鳥の叫びにも

似て風泣きぬ野より山より

早春の風がもたらす調べをば

太古の民の雅樂とぞ聞く

群星は叛きて去りぬ只ひとり

黎明を戀ひ立てる明星

全世界その足もとにひれ伏しぬ

見よおごそかに昇る太陽

氣紛れの我れを捕へてこもごもに

蛇と女神と口づけに来ぬ

我れとても生ける屍かばねととのふるや

三十年を碌々と過ぐ

火の車我が後ろより我れを追ふ

あはただしさに今日も暮れ行く

國境の山むらさきの被衣かきして

春の汀にほゝ笑みて立つ

美しく飾る花壇に蛇ありて

隠ると誰れか知る人を無き

つくねんと一人、思念を凝らすとき

僧房としも思ふ我が部屋

我魂はプリズムに似て輝きぬ

秋の光りを七色に解く

どこしへに縁を慕ふ子となりて

老ゆるを知らず死をば思はず

自らの影を抱きて月に立つ

淋しき心遣りどころなし

街行けば兒が土産のみ眼につくと

シカゴより書く良人の消息

幾たびか胸の素絹に描けるは

君が歸朝の船のまぼろし

山おろし吹けば心の端にかかる

ロッキーの風ハドソンの波

秋なれや我が魂遠く幾千里

ミシガン湖畔を今日もさまよふ

あこがれの心海越えさすらひぬ

漂流記をばつくる我が胸

君歸る船の影をば浮べ見ぬ

近き未來の序の幕はこれ

美しき心と心あひ觸れて

何を思へる初夏の薔薇

夢の城建てゝこもりぬ騒音を

避けてぞ我れは我れと語らふ

うなだれて咲くひなげしよ我に似て

一人いちにん生くる淋しさを知る

いづこより來り何處に吹く風ぞ

ふと生死いきてを思ふ此の頃

今日よりは裸はだかに歸らんと灰色の

殻かを破りしちさき靈魂たましい

つゝましく生きんとすれど我胸に

ドン・キホーテの氣紛れぞ住む

ふるさとを出で、十年うつし繪に

むかし戀しき島の草原

寝前の祈りせんさて兒は胸に

指くみしまゝ夢の國ゆ

夜の辻に一杯二錢氷水

それをめぐれる夏の夜の人

夕涼み絃歌かしまし淀川の

亂宴の灯の赤き夕暮れ

若人が三人五人打ち群れて

法悦に酔ふ青き灯のもと

三千の女工が洩らす吐息をば

一度に吐くや紡績の笛

初夏の雲にまかせし此のこゝろ

大鳳の賦を口ずさみ行く

なよやかに虞美人草はうなだれて

項羽の末路をささやきて泣く

夕焼けの彼の空に似し此のこころ
燃ゆる聖靈の火の色の雲

己れをば先づ知れよとぞたましひの
いと秘かなる部屋の底より

二の腕に蛇の入墨をしたる人

読み耽り居り『死線を超えて』(電車中にて)

三重巻けば汗の底よりにじみ出ぬ

呪はしきかな一丈の帯

恨めしくあと見送りぬ我が裾に

泥はね散らし走る自動車

築くとき亡ぶ運命と誰れか知る

高く仰げるバビロンの塔

鳳翼をつけて蒼穹幾千里

舞はんとねがふ春のまぼろし

まぼろしを描きて馬を進めつる

ドン・キホーテに似たる我胸

限りある世に限りなく生きんとし

魂を無限につながんとする

煤煙をのがれて茲に岸の里

百舌鳥も来て鳴く南海の秋

二重まる一つもらひて凱旋の

將軍のごと歸り來る兒

練習帖ひらけば母の眼にうつる

ハナ・ハト・マメのあやしかる文字

得意げに二十歳の甥が哲學を

説くも心のむづがゆき春

死を超えて今ぞ生命によみがへる

春を歌ふや復活の鐘（イースター）

くろがねの扉排して我が魂の

よみがへる日よ天地の春

死の影の谿に光りを投げて來し

聖き使者と白百合の咲く

そむきたるペテロに聖きみ姿を

うつすもゆかしガリラヤの海

釘の跡見では信仰の起らざる

まどへるトマス其人に似る

イースター其の鐘の音にファウストも

毒の杯投げにけらすや(以上)

新緑の微光のかげに物思ふ

子が夢を吹く初夏の風

夕ばえに笑める美神のすがた見ゆ

茲も希臘か南海の海

會堂の窓をふさげる大銀杏

羅馬法王の驕りにも似て

緑金の孔雀の羽を廣げたる

如くよそへる初夏の女

頭より手足の出たる素描あり

未來を持てる小さきラファエル

紅燈の絃歌もかなし光りをば

戀ひて旅する巡禮の子に

女をば時に夜叉とも佛とも

呼びて魔視する男ひまあはれなる

青玉せいぎよくの簾を垂るゝ氷屋の

軒に客呼ぶ水色の風

ダリヤ咲くローマの花神フローラの

瞳を見せて火と燃ゆるかな

しわしわ枯れし聲高らかにヴァイオリン

弾く男あり夏の夜の辻

専横のちさき君主の捕虜となる

蟬は時々ヂ・ヂと訴ふ

汽車は行く淋しき秋の我が胸に

山も来て泣く海も来て泣く

されざれにちいどすがれし虫の聲

秋に瘦せたる靈魂たましひの聲

友我れに『參政權を論せよ』と

芝居の役の少し似つかず

投げやりし麩に集れる金魚にも

悲しや生の争ひを見る

秋白う星降る夜なりしみじみと

サンタマリアを歌ひても見ぬ

羽衣の失せし天女に似たるかな

仰ぎつ戀ふる秋の天空

右ひだり土産買ひ召せ斯く呼びて

箕面紅葉のてんぷらを賣る(箕面にて)

一筋の生命の河はたましひの

内外を聖め澄みて流るゝ

遣り羽子の玉の音色も軽らかに

心のはじく元朝の春

黄金のうてなに春の夢を盛る

幸を歌へる福壽草かな

寒椿つよく醒めたるたましひの

意氣をば見せて寒空に咲く

一切を超ゆるを得ずば否むしろ

大馬鹿となり安きをば得ん

圓光をかづくエスにも似たるかな
星を随へ立てる月かさ

キリストは野に釋尊はヒマラヤに
我れは無人の島を欲りする

星はみな光れど魂を俗界に
委ぬる人にかかはりも無し

天地の光りとなりて果てもなき
無限を守る白き星かげ

街路樹のプラタナスさへ聲あげて
吹く木枯しの鬪弄に泣く

静脈の青き筋引く手を見つめ
我が衰へに泣かさるゝ冬

何事ぞ高き理想の子等もまた

平凡に生き平凡に死す

きさらぎの春忍びかに我れに来て

魂の扉にそと觸れて見ぬ

我が胸によみがへり来る生命あり

春の大地は生きて脈打つ



よみがへる

主のみ定めを

しのはせて

醒し一輪

白百合のさく

物すこし思へる様にきさらぎの

雲の動けり紅梅の咲く

我が生命いのち我が喜びを乗せて今

タフトは沖に黒けむり吐く(真人の歸朝の日に)

君が船浮べて海は紅白の

波立てゝいま岸に近づく

夕焼けのオレンジ色の輝きも

君を迎ふる我が魂の色

いと遠き海王星のへだたりに

在りし君いま我が前に笑む

春の風胸にそよげばたましひの

羽ばたきの音いと高きかな(以上)

ちさき穴部屋の襖のそこここに

父が土産の鐵砲のあと

戦さごとひとり足らねば母に来て

雑兵たれと子はせがみ立つ

天地にひそむ生命を君見よと

聲なくさとす白き木蓮

青き鳥みなみの國の春を乗せ

來りて舞ふや三月の野邊

祭壇の火をみよとてや殉教の

血を偲べとやアマリリス咲く

日に幾度蛇の心と主の心

もつれ争ふ明暗に生く

むらさきの雲の行衛に眼を据えて

塑像の如く椽先に立つ

くれなるの絹に觸るとしか思ふ

野より野を吹く三月の風

イースター胸に高鳴る鐘の音に

あはせホザナを叫ぶこの朝

復活の鐘に目醒めしよろこびに

石も叫びてとこしへを祝ぐ

よみがへる主のみ姿を偲ばせて

聖し一輪白百合の咲く

毒杯を手にせる刹那ファウストの

心を奪ふ復活の鐘

誰が染めし汝が火の色よ血の色よ

キリストの血かステパノの血か

雀の子アンテナに来てチチと鳴く

静かなる日よ六月の朝

大空の秋の心とたましひの

觸れて生命の我が歌は成る

青白き月夜の庭にまぼろしを

描きて酔へるコスモスと我れ

秋に酔ふ子等は歴史にかかはりも

あらず笠置の山の一日

山に来て自然を抱き歌に酔ふ

子等は黙して秋と語らふ

大空を我れ一人のものとして

草に憩へば廣きあめつち

山々の野火の焰もちらちらと

見えてなつかし月の夜の原

停車場の笛とんきやうに鳴り出で、

淋しき秋の夜の街を吹く

豊穰の秋を歌ひつ農夫らは

平和の笑みを土に捧ぐる

絢爛をきそふ紅葉よ終りをば

飾らんとすや誇らんとすや

どこしへに我を導く星ありて

かがやけるかな生の大道

寝前の祈りの姿その儘に

夢のエデンに遊ぶおさな兒

主に生くる身は輝きの國さして

同行二人巡禮の旅

パトモスのヨハネを氣取り日を過ぐと

佐渡より書ける友の消息

主の幸に我がたましひの酔へるとき

生くるを知りて死をば思はず

くりすます鐘の音たかし熟睡じゆすいより

醒めて生命いのちを受けよとぞ鳴る

群星は銀の小鈴を打ち鳴らし

星を讃ふるベツレヘムの夜

二千年遠き彼の日を偲おもばせて

生命の光り投ぐる星かけ

金銀の星降る夜なり仰ぐ眼に

見よ感激の涙はてなき

ベツレヘムありし其夜の星かけに

永遠とこほの生命に觸るゝたましひ

雪の原玉をまろばす鈴の音に

サンタクロスの櫓は近づく

千萬の心に觸れて彼の星を

戀ひて讃ふる世なり我なり

世はかはり人は變れど變らざる

生命の星は今日もまたたく

夢遠くありしユダヤの星かげを

偲びて永遠の光りをぞ戀ふ

世に生きる子等に幸をばもたらせて

地上に天降るや天上の星

此のなげき七千萬の同胞は

消えし光りを戀ひてひた泣く(大正帝の崩御に)

天地に光りは消えて諒闇の

春は涙にくれてかしこむ

萬歳の歌も聞えず羽子の音も

冴えず年立つ諒闇の春

おん父と仰ぐみかどの神去りし

葉山はかなし大正の子に

靈柩を送る此の日や湘南の

松吹く風も聲あげて泣く(靈柩葉山より東京に)

おほいなる地上の歎きに共鳴りて

月も碎くる相模灘かな

此の心行くべき道も知らずして

重く迷へるきさらぎの雲

天も地も大喪の日を悼み

涙にくもるきさらぎの空

哀悼の心を載せてしめやかに

東に流るきさらぎの雲

かなしみのうちに迎ふる改元の

春の光りを仰ぐくにたみ

明暗の雲あひ寄れる心地して

昭和の春を迎へけるかな

鎖されし魂の扉は開かれて

昭和の春におどる我が胸(以上)

生くる日の我が幸ひを心より

讃へて歌ふ春の陽のもと

紅白の蝶わが前に亂舞すと

スウキートビーを見つゝ文書く

胡蝶をば追へる兒を追ひ母もまた

黄金の波打つ菜畑に立つ

青き雲くれなるの雲どこしへの

生命に萌ゆる三月となる

三月の乙女うつくし晴れやかに

極樂鳥の舞へる如くに

美しき水晶宮にひとり住む

まぼろしを見る雪の朝かな

星あまたオリオン座より背き去り

地上に散るやと夜の雪を見る

裸木はだかぎをなほ虐ぐる冬の風

涙のかれし人に似るかな

眼を閉ぢて祈れば膝に乳を吸へる

兒は二つ三つ母が頬を打つ

火を越えて將た水を越え死を超えて

我が來りつる生の足跡

我れをしも女面メノオモ獅身シオン像ゾウゾウにもなぞらへぬ

意に満たぬ日の猛る心に

巢も穴も持たでさまよふ失業の

子等は狐に鳥に劣れる

風寒し生活セイゴのため兒を棄つる

人ありと聞く堪へがたきかな

草も木も愛の生命によみがへり

脈打ち初めし春の大地

血の色に大地は萌えぬ大いなる

春の力のよみがへり来て

どこしへに光りの國に住まんかな

死なく陰府なき輝きの國

春は來ぬ下駄のうす齒に蹂られし

道の小草も萌ゆる日となる

火の鞭か刃の責めか血を弄ぶ

魔の悪戯ことこのあまりあくどし(奥丹震災に)

悪夢よりなほ醒めやらずいつ迄か

どくろの舞を見てありぬべき

呪はれし大地よとくも甦れ

春は目醒めて躍るならずや(以上)

五月雨に若葉の色も色づきて

緑の生を歌ふ日となる

不老不死求めて得ざる帝王に

まさりて永遠に生くる主の友

朝顔と夕顔の鉢あひ向ふ

陽をたたへつゝ陽を呪ひつゝ

輝きの御國にいたる大道も

斯くやと仰ぐ天の河かな

大地より生れし儘の人として

夏の陽を浴み野良に立つ人

三毛と兒と小さき手もてじやれ合ひぬ

生ける口繪を涼風の吹く

我が太郎受話機を耳に居睡りて

ラヂオは遠く夢の國より

汽車を投げ飛行機を割り嬉々として

笑む弟に泣かさるゝ兄

すかされつ母とともどもつくろひし

粘土の汽車に春の風吹く

愛らしき喧嘩に日毎賑はへる

我家は四季を春の風吹く

新らしき世の創世に逢へるごと

沈黙にこもる黎明の空

繚亂の花くれなるに初夏の

大地の胸を血もて色どる

夏は雁冬はつばめと化さんなど

斯く人間の氣紛れはいふ

雪山の修験の行者うらやむも

夏負けの身を持ってあぐむ果て

海の風聲なき樂をかなで吹く

夏はもよろし南海の夕

白鳥の胸の如くにふくらめる

白帆は海を滑らかに行く

山眠り海また眠る夏の夜を

星と我れのみ醒めてささやく

夏まひる女なる名を呪ひつゝ

今日も蒲團の綿入れをする

聲せざる樂に合せて我が歌ふ

夢の譜を吹く八月の風

噴水のしぶきを受けつたたずめば

水精ミツホウの舞ぞまぼろしに浮く

我れとても海に住ままし夏こそは

海女も人魚も羨ましけれ

山に來て偉なる力にこころ觸る

此の一瞬よ死して悔ひなし

夏負けの我れは瀕死の白鳥が

終りの息に似し吐息つく

尼もよし断髪もよしなど言ひつ

夏の女は黒髪を梳く

星かげに久遠の光りしたひつゝ

世の外の世を思ひつづくる

散らばれる心を静め聖めんど

星を目あてにわが魂は行く

兒を寢せてほと息をつき硝子戸に

寄れば静かに星流れ入る

パンのみに生きる人々集りて

争へる世は淋しからずや

暗に浮く白き小菊よ星降りて

地上に聖座をつくる我庭

追はれつゝ遂に追ひつめられしごと

心忙はしき十二月かな

天地に足るみ恵の一とはしを

受けてことほぐ初春の窓

正月は繪にせまほしき乙女子の

羽子より春の序の幕はあく

聖書を火に投げて家拜を亂す兒よ

羅馬のネロに似たる暴君

あゝ生命その源に觸れよとや

見よオリオンの星座の輝き

十字架を負へるクレネのシモンにも

似て幸多きカルバリの道